別紙１（博士論文の審査結果の要旨）

専攻名　システム創成科学専攻
氏　名　松野尾仁美

本論文の審査は平成 26 年 2 月 10 日に最終審査を行った。以下に本論文の概要と評価を述べる。

女性の社会進出率の増加や高齢化社会の進行する中、家族形態の多様化が進み、子どもを取り巻く環境は大きく変化してきている。特に近年は、地域の子育て機能の消失や育児情報過多の中での子育ての難しさ、育児と仕事の両立による負担の大きさもあり、保護者世帯の保育ニーズが高まってきており、保育所サービスに対する保育ニーズも多様化の様相を呈している。こうした背景の下、本論文では、保育ニーズが多様化している現状を明らかにするとともに、保護者が送迎を行わなければならない保育所において、保育所、居住地、勤務地の関係が重要であることを踏まえた上で、保護者の選択的自由度が高い居住地の選好に着目し、その要因分析を行っている。また、保育所運営者の保育所運営者の保育方針及びサービス意向から見た認可保育所における保育所サービスを抽出し、保育所の立地と、提供できる保育所サービスとの関連を分析している。本研究では、これらの分析の結果をふまえ、保育ニーズと保育所運営者の保育方針及びサービス意向から見て、認可保育所サービスにどのような課題があるかを述べた上で、これからの認可保育所のあり方を示すことを目的としている。

本研究は７つの章で構成されている。

第１章では、研究の背景を述べるとともに、研究の目的、及び調査対象と範囲を示している。また、既往の研究成果について概説し、居住ライフスタイルと関係の深い居住地選好と保育ニーズの関係を示した研究や保育ニーズの多様化の要因を分析した研究があまりないことを指摘し、本研究の新規性を述べている。

第２章では、認可保育所サービスにおける制度規定と課題について述べている。認可保育所に関わる現行法を概説するとともに、政策の流れや今後の保育情勢を整理し、制度上の課題を述べている。

第３章では、保護者の保育ニーズについて調査を行い、保育ニーズの評価軸とその主な評価因子を抽出し、評価タイプの類型化を行っている。分析の結果、『時間の融通』、『子どもの教育環境』、『子ども・保護者の保育交流環境』の３つの因子を抽出し、4 つタイプに類型化している。保護者は時間的融通に留まらず、施設的な部分や保育士対応など多様な評価軸を持って保育所サービスを評価しており、保育ニーズが多様化している現状を明らかにしている。

第４章では、保護者の居住地選好、及び居住ライフスタイルの志向性の分析を行い、第３章での保護者の保育ニーズの類型化と保護者の居住地選好との関係性を把握している。それにより、居住地選好と保育ニーズに関連があることが示され、保育ニーズの多様化は、居住地選好との関係が深く、居住ライフスタイルの多様化が要因となっている可能性を示唆している。

第５章では、保育所運営者の保育方針と保育所サービスの意向について調査を行っている。調査では保育所の施設や周辺環境の適正度とともに、保育所運営者から見た保育方針の意向の把握と保育方針の類型化を行っている。その結果、『しつけ重視』、『情操重視』、『のびのび重視』の３つの主要な因子が抽出され、4 つのタイプに類型化できたことを踏まえ、保育所サービスにも個性化の傾向があることを示している。また、保育所サービスと立地に着目して、保育所類型化と立地には関係性がある傾向を述べている。

第 6 章では保護者の保育ニーズと保育所が提供している保育所サービスを比較検討し、今後、どのようなサービスが求められているかを明らかにするとともに、保護者の保育ニーズと保育所運営者の保育方針から見た認可保育所の課題を述べている。保育所運営側の保育方針では、保育所サービスには、厚生労働省の保育所保育指針に基づく必ず満足すべき基礎的な部分と、その上位的な保育所裁量範囲の階層的な構造があり、上位部分は保育所の保育方針に基づいて決定されており、保育所毎に異なる為、保育所の個性化に繋がっていると考えられることを指摘している。

第 7 章ではまとめとして、多様化する保育ニーズに対し、保育所の個性を伸ばすことが、ニーズに応える可能性となることを示唆し、併せて今後の研究課題を示している。

本研究では、当該立地における保護者の保育ニーズの傾向と保育所が提供できるサービスの方向性を示しており、保育ニーズと保育所サービスのマッチングの可能性を指し示している。また時代に合致した研究であり、研究結果は保育所運営に関わる政策の提案に繋がると考えられる。

本論文の研究成果は、国際ジャーナルに審査付論文 1 編、学会シンポジウムの講演発表 1 編がそれぞれ掲載・採択されており、専門分野における実績が評価されていることが認められる。

平成 26 年 2 月 13 日に実施した学位論文公聴会では研究成果が流暢に、かつ分かりやすく発表された。22 名の参加者から因子分析の取り扱いに対する改善工夫、選択肢の少ない中で保育所サービスを選択することの現実的有効性、保育所選択モデルへの発展性などに関して種々の質問がなされ、いずれの質問に対しても著者から明確な回答が示された。

以上の審査結果に基づき、本論文は博士（工学）の学位を授与するに十分に値すると判断され、審査委員全員一致で合格と判定した。